

二〇二四年度

適性検査型入学試験Ⅰ

注意

- 1 問題は **1** のみで、**9** ページにわたって印刷してあります。
- 2 試験時間は**四十五分**で、終わりは**午前九時四十五分**です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい**。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受験番号と氏名**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

受験 番号	
氏名	

中村中学校

問題は次のページからです。

1 次の文章1と文章2とを読み、あとの問題に答え

なさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

(*印のついている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

文章1

サステイナビリティとは、今日まで私たちの社会のなかで大事にされてきたことをまもりながら、これから新しく私たちの社会のなかで大切にされてほしいことをきちんとか切にできるような仕組みをつくり、さらにそのような考え方を次世代につなげる、という考え方のこと。

サステイナビリティをこのようにとらえ直し、再定義した上で、ではその新しい和訳を考えてみると、それは「まもる・つくる・つなげる」がよいのではないかと考えています。

ここでの「まもる」は、「守る」であり「護る」です。

10

これまで私たちの社会のなかで大切にされてきた物事や価値観を守り保全しながら、外から害を受けないようにかばい保護することです。これには自然環境や遺産など有形

のものも、それぞれの地域の風土に根ざした民俗芸能や信仰、伝統知のような無形のものも含まれます。

「つくる」は、「作る」であり「創る」です。物理的な

ものや仕組みを作ることであり、アイデアや価値を創ることです。これには、低炭素社会への転換を図るために必要な環境技術の開発や、我々の社会に生まれる全ての子どもたちが毎日栄養のある食事を取ることができ、質の高い教育を受けることができるようにするための仕組みというようなものも含まれます。

そして「つなげる」は、「繋げる」であり「継承(継いで承る)」です。人々がつながって「私たち」という共同的な主語を持つことであり、世代を超えたつながりを意味します。ここでのつなげるは、これまで私たちが社会としてまもってきたこと、これからの世の中をより良くするために新しくつくったことを、将来世代へと手渡していくことです。

5

こうしてサステイナビリティを「まもる・つくる・つなげる」ことととらえると、いずれもが日常会話のなかでも頻繁に使う動詞ですから、より社会に広く浸透しやすく

30

頻繁に使う動詞ですから、より社会に広く浸透しやすく

なるでしょう。また、これまで「持続可能な開発」と言われてきたものについても「まもり、つくり、次世代につなげる開発」と表現してみてもよさそうです。表現としてやや長いのがネックかもしれませんが、その場合には、「持続可能性とは、まもり、つくり、つなげることだよ」というように、難しい言葉をその意味を噛み砕いて子どもに教えるときのように、持続可能性の副題として使ってみるとよいと思います。

40

さて、サステイナビリティの定義を「将来世代にまもり、つくり、つなげていきたいことを考え行動していくこと」とすると、^⑦次に考える必要があるのは、どのような主語

でこれを語っていくのかということになります。サステイナビリティについて、ひとつの統一された主語で語るとい

45

うことには、実は大きな難しさがあります。それは「何をサステイナブルにするのか(何をまもり、つくり、つなげていくのか)」ということについて答えるときの主語を、一個人の「私」にしてしまうと、私が考えるサステイナビリティと他人(他の「私」)が考えるサステイナビリティが、^⑧頻繁に衝突を起こしてしまうからです。将来世代にわた

50

ってまもり、つくり、つなげていきたいと考える事柄について、私たちが全会一致で合意できたならば、その実現のために必要な行動もきつとスムーズに進めていけるのでしよう。しかし、実社会においてはそのような合意が取れるということとは非常に稀なことです。

二〇一八年八月、スウェーデンの一〇代の環境活動家であるグレタ・トゥーンベリさんがはじめた気候変動のための学校ストライキと、それに続く大人世代に適切な行動を要求するデモが大変話題になりました。彼女の行動に賛同

60

し実際に自分たちでもデモを組織したり参加したりした若者が世界中にいた一方で、必ずしも全ての国のリーダーたちがそうした先進国の若者を中心とした気候変動に対する社会運動に対して好意的な受け取り方をしたわけではありませんでした。既に産業化を果たし、経済面でも教育や医療福祉の面でも豊かになつた国々の若者が発したメッセ

65

ージには、意図せず、今まさに彼らの国のように豊かになることを目指している開発途上国に対して、これまでに様々な環境負荷を生じさせた上で豊かになつた国々が、これ以上の資源利用や炭素排出をしないように要求する

70

ような側面があり、そのことが強い反発を生みました。このように、気候変動という全人類に共通の課題についてさえ、私たちはその対策に求められる国際的な合意にたどり着くために、長い年月にわたるタフな交渉を繰り返してきています。

75

気候変動のように世界的に重要とされる課題についても、それぞれの立場からの異なる正義の押し付け合いが生じるのであれば、やはりそうした対話のなかでどのような表現を用いるのかについて深く考える必要があります。

例えば、SDGsがメディアで取り上げられる際に「自分事」という表現が頻出します。SDGsはどこか遠くの国の知らない誰かの話ではなく、自分たちの国や地域で今まさに起きている諸課題を解決していくために必要なものであり、個々人がSDGsを自分事として行動していく必要がある、そうした責任が私たち一人ひとりにはあるのだ、と語りかけてきます。読者の皆さんはこうした個人の行動を喚起するメッセージに対してどのような印象を持たれているでしょうか。

85

私は「自分事」のように個人の行動と責任を強調する表

現は、効果的な場面とそうでない場面があると思います。SDGsや社会課題などについて「自分事として行動を」と言われると、自分がどう関わられるのかを考えるきっかけになる反面、今までそのことについて特に詳しく知らずとも何か行動しようとしてもしていなかったことについて少し責められたような気がして、多少の居心地の悪さを感じてしまったりもするものです。

95

こうした側面がありつつも、個人の行動や責任を強調するメッセージは今後もさらに加速していくような予兆があります。例えば、気候変動に対してグローバルな倫理観を示す「地球規模の正義 (Planetary Justice)」や、環境を全人類で共有している資源であるとする「グローバルな公共財 (Global Commons)」というような考え方が国際学会などで頻繁に登場するようになってきています。こうした「地球」や「グローバル」という全ての人々を含んだ主語を用いて一人ひとりの行動を促そうとする語りは、あるひとつの考え方を示すことで、それとは異なる意見を説得するようなコミュニケーションになっていきます。私はこうした論調が出てくる要因は「個人」を主たる単位として

105

100

議論が組み立てられていくからだと見ています。こうした語りが必ずしも全ての社会に馴染むわけではないでしょうから、より集団的な意識の強い社会に向けては、異なる主語を用意する必要があるでしょう。私は、その主語こそが本書のタイトルにもある「私たち」だと考えています。

気候変動やSDGsに代表されるような全地球的なアジエンダについて考えるときには「地球」や「グローバル」というような、スケールがとても大きい主語が必要になります。これらの主語を用いて語られるのは、地球的課題に

全人類が協力して取り組む必要があります、そのことについて「私」という個人が適切に行動しているかどうか、責任を果たしているかどうか、という世界観です。ですが、こうした話は私という一個人が日々暮らしている時間や空間とはスケールがかけ離れたものでもあり、なかなか手触り感のない話です。

それでは、サステイナビリティについて考えるときの主語を「私」から「私たち」にすると何が起ころうのでしょうか。まず、「私たち」が示す範囲について考えてみたいと思います。

読者の皆さんは「私たち」という表現を使うとき、どのくらいの範囲の人々が含まれている感覚があるでしょうか。あなたの両親や兄弟くらいの範囲の人たち、職場や学校で親しくしている人たち、住んでいる場所のご近所さんや町の人たちなど、複数あることと思います。もちろん、物理的な空間に囚われる必要はなく、SNSなどを通じたオンライン上の知り合いやグループという範囲もありえます。こうしたそれぞれの範囲において個別に形成される「私たち」において、大事にされている物事は、共通するものと異なるものがあると思います。例えば家族の範囲の「私たち」と、職場や学校の人たちの範囲の「私たち」では、大事にしている価値観が違っているでしょう。しかし、私たちはそうした複数の「私たち」の間を歩き来し、異なる意見や価値観を上手く受け入れながら、日々を暮らしています。

このことが何を意味するのかというと、まず「私たち」という主語は最初から複数の境界を含んでいるということです。「私たち」と発するとき、それはそのときそのときの文脈によって異なる範囲の人々を示しており、その範囲

困の人たちが共有している価値観を参照しています。例えば、家族のことを指して「私たちは(私たち家族は)」と言うこともあれば、住んでいる町のことを指して「私たちは(私たちこの町の人間は)」と言っていることもあるでしょう。つまり、「私たち」は多元的に世界をとらえるために

150

私たちがほぼ無意識のうちに日々使っている共同的な主語なのです。別の言い方をすれば、「私たち」という主語は、複数の異なる価値観を持った集団を併存へいぞんさせています。

こうした特徴を持った「私たち」という主語でサステ

155

イナビリティを考えるとすることは、その時点で複数のサステイナビリティがあることを受け入れ、それらのあり方を考えるということになり、「何をまもり、つくり、つなげていくのか」というサステイナビリティの中心的な問いに対して、無理なく、複数の異なる回答を持つことにつながっていきます。

160

(工藤尚悟『私たちのサステイナビリティ

—まもり、つくり、次世代につなげる』岩波書店)

【注】

* 低炭素社会……温室効果ガスの一つである二酸化炭

素の排出量削減さくげんを追求した社会。

* ストライキ……労働者や学生が、要求を実現するた

めに団結して業務を停止すること。

* デモ……特定の主張や抗議こうぎの意志を持った人たち

が、その主張を街頭行進などで他に示すこ
と。

* アジェンダ……検討課題。

私はこの本を読んだみなさんが、生き物の命の尊さについて共感してくれたと信じます。そして、みなさんがお父さんやお母さんに「ダンゴムシって大事なんだって」とか、「メダカがいなくなったらしいけど、守らなくちゃね」と言ったとします。想像されるのは「その気持ちはわかるけど、世の中はそんなもんじゃないんだよ」という大人の反応です。

つまり子供はサンタクロースを信じるように、非現実的なことをいうが、現実にはサンタクロースはいないし、メダカがいなくなっても人間の生活に困ることがあるわけではないというわけです。

それでもみなさんがさらに主張したら「メダカのような小魚と人の命のどっちが大事か、考えればわかるだろう」というような返事が返ってきておしまい、ということもあるでしょう。

しかしこれは二重の意味でまちがっています。一つは、人の命がメダカの命より価値があるのが正しいとはいえないからです。メダカは小さく人が大きいからでしょうか。

では、ゾウは人より価値がありますか。人は知能があるからですか。

なぜ知能という、生物が持つ多くの性質の中のただ一つのものが特別の価値があるとされるのでしょうか。ヒトは鳥のように空は飛べないし、モグラのようにトンネルを掘れないし、イルカのように泳げません。人ができなくてほかの動物ができることは無数にあります。知能だけが価値があることの根拠は曖昧で、それは人間がそう考えているだけのことです。

もう一つのまちがいは、メダカだけをとりあげて比較することは適切でないという意味においてです。メダカがいるということは汚染おせんされていない水があり、そこにプランクトンも生きているということですから、メダカがいなくなることはそのことが果たされていないことを意味します。それは人が住む環境も、あるレベルを超えた汚染段階にあるということです。その意味で、人間中心に考えてもメダカのないことは危険だということなのです。

つまりメダカがいる、いないだけでなく、メダカを総合的にとらえれば、メダカがいなかったことの意味が理解

されるのに、問題を「メダカか人か」というレベルにとどめるのは正しくないということです。それでは大切なことを見失ってしまいます。さらに言えば、子供より大人の考えが正しいとは限らないということもしばしばあります。

このような例は無数にありますが、一つだけ具体的な例をあげて考えてみたいと思います。1章で玉川上水のタヌキのことを書きましたが、玉川上水は江戸時代に作られた水路で、上水、つまり人々の生活用水を確保する水路でした。その役割は1965年まで続き、部分的には今でも機能しています。

できたときの玉川上水は、西の羽村から江戸の四谷までの43キロメートルありましたが、1965年に杉並区の久我山がやまよりも下流の13キロメートルは暗渠あんきよになりました。暗渠とは、要するに蓋ふたをして水を地下で流すことです。その結果、ここから下流は道路になり、樹木はもちろん、野草もなくなり、昆虫こんちゆうも鳥も、もちろんタヌキも住めなくなりました。

なぜそんなひどいことをしたのでしょうか。当時は日本が高度成長期で、東京は1964年のオリンピックを控えて

55

街中を工事で改修していました。当時の人たちにとっては、玉川上水があることはむしろ邪魔じやまであり、当然のように、蓋をして道路をつけた方が都民にとって便利でプラスになると考えられたのです。ですから、杉並より上流も同じように暗渠にすると決められる可能性は十分にあつたし、もしそうなつていけば多様な樹林やその下に咲く野草、昆虫、野鳥なども消滅しょうめつしてははずです。

玉川上水の暗渠工事は一部だけで止まってよかった、なんとかこれから残してほしいと思いますが、東京にはその高度成長期に計画された道路があり、今でもその拡張計画が進められています。そういう計画を進めるとき、動物の調査もおこなわれて、計画の妥当性だとうせいが検討されますが、基本的には「希少な動植物はいないか」ということが基準になります。

都会の緑地でも希少な動植物はいるにはいますが、なんといつても都会のせまい緑地ですから、そういう動植物は少ない、あるいはほとんどないということも多くあります。そしてそれが工事してもいいという免罪符めんざいふになります。

しかし、この本でくり返し述べたように、①ありふれた

75

70

普通の動植物がいることには、大きな価値があるのです。それらの生き物がつながりあつて生きていることを知れば、そのことが私たち人間の生活にも大きな意味を持つことが理解されます。

こういう工事に携たずわる行政担当の人々には、長い目で

見た時に何が大切であるか、ある時代に決めたらといった時代の価値観は変化するのであり、不要だと判断されたら計画を變更へんこうできる判断力を持つてほしいと思います。そしてこの本の読者であるみなさんが今後、社会に出て、そのような力になってくれることを期待します。

85

（高槻成紀『都市のくらしと野生動物の未来』

岩波書店）

〔注〕

* 免罪符……罪や責任をまぬがれるための事柄ことがら。

〔問題1〕

㊦ 次に考える必要があるのは、どのような主語でこれを語っていくのかということになります。とありますが、それについて筆者はどのように考えていますか。解答らんに当てはまるように文章1の言葉を用いて答えなさい。ただし、 A B は十字以上二十字以内で答えなさい。

〔問題2〕

㊦ 「ありふれた普通の動植物がいることには、大きな価値がある」とありますが、文章2ではそのような動植物の例としてメダカが挙げられています。筆者はメダカがいることによつてどのような価値があると述べていますか。文章2の言葉を用いて答えなさい。

〔問題3〕

あなたが今後社会に出たときに大切にしたいことは何ですか。あなたの考えを四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、次の条件と〔きまり〕にしたがうこと。

条件

① あなたが**文章1**・**文章2**から読み取った、共通していると思う考え方をまとめ、それをはつきり示すこと。

② **文章1**の「まもる」「つくる」「つなげる」の中から一つ選び、「①」の内容と、社会に出たときに大切にしていきたいことを関連させて書くこと。

③ 適切に段落分けをして書くこと。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話をに入れる場合は行をかえてはいけません。
- 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じように書きます（ますめの下に書いてもかまいません）。
- 。と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「」で一字と数えます。
- 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。

以下、余白です。